

カキ養殖にローカル5 G活用 広島・江田島で実証実験

2021/01/27 19:10 日本経済新聞電子版 470文字

エリアを限定した高速通信規格「ローカル5 G」を活用し、海面下の状況を可視化してカキ養殖の生産性を高める実証実験が広島県江田島市で始まった。水中ドローンで撮影した海中の鮮明な映像のほか、養殖地の海水温や酸素濃度、カキ殻の成育状況などをリアルタイムで確認し、必要な対策を随時打てるようにする。

総務省の2020年度委託事業で、ローカル5 Gの海上利用での通信品質や性能の評価もする。レイヤーズ・コンサルティング（東京・品川）や東京大学、NTTドコモ、NECネットエスアイがコンソーシアムを組んで進める。21日付で無線局の免許が中国総合通信局から付与された。

実証では水中ドローン3台を海上の船やカキ筏（いかだ）からケーブルでつなぎ、陸上から遠隔操作する。5 Gを活用して映像や海水データを送信し、陸上で確認する。これまで海中の状況を把握するためには海に潜って目視で確認する必要があり生産者の負担が大きかったが、大幅な省力化になるという。

レイヤーズや総務省などは今回の実証で得たノウハウを活用し、全国の養殖場など1次産業の幅広い分野に応用を進める考えだ。



カキ養殖が盛んな江田島

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.

許諾番号30080354日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。